

育苗労力とイチゴ炭疽病発生リスクを

低減する「きらび香」の本ぽ増殖栽培

私が紹介します！



静岡県農林技術研究所
野菜生産技術科 科長
河田 智明

一 はじめに

イチゴの育苗では、苗の密集、上からのかん水などの要因により炭疽病の発生リスクが高まり、近年の高温と相まり炭疽病による苗不足が問題となっています。このリスクと育苗労力を軽減する技術として収穫株を利用して本ぽで増殖する育苗方法(2008あたらしい農業技術)があります。育苗ほが不要になり労力が軽減される反面、除塩、土壌消毒ができないため病害虫発生リスクが高まるという課題が残されています。現在研究を進めている早期に花芽未分化苗を定植して本ぽで増殖する方法(本ぽ増殖法)は、定植後点滴チューブによる自動かん水を行うことから、炭疽病発生低減効果が期待されるとともに、育苗労力の軽減も期待されます。ここでは、これまでの研究成果について紹介いたします。

二 増殖株数

本ぽで増殖する株数が多いほど必要な育苗株数は少なくなるため、「きらび香」において、本ぽ増殖法による増殖株数の違いが頂花房開花日に及ぼす影響について、増殖なしの未分化定植と慣行の分化後定植と比較検討しました。

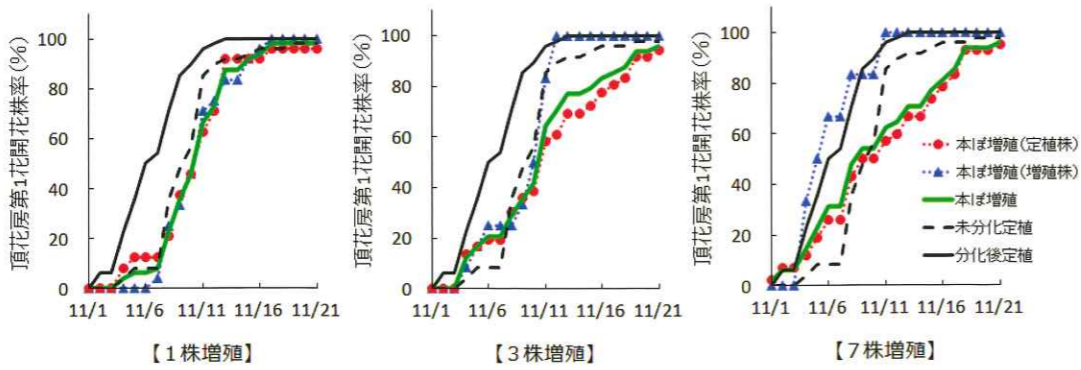


図2 増殖株数の違いが頂花房開花株率に及ぼす影響 (2020.山口)

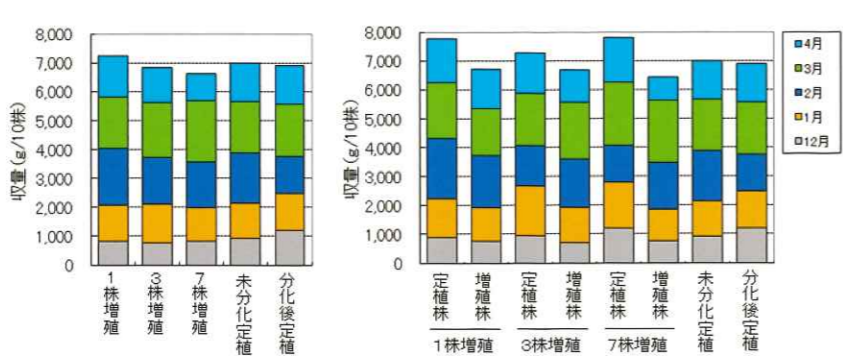


図3 増殖株数の違いが収量に及ぼす影響 (2020.山口)

増殖終了後は花芽分化確認まで定植株も増殖株も乱形果発生を軽減させるために2葉で管理しました。増殖終了後も切り離しは行わず、10月下旬にそのままマルチをして4月下旬まで栽培しました。花芽分化確認後、養液ECは0.6〜0.8dS/mの当所慣行管理としました。

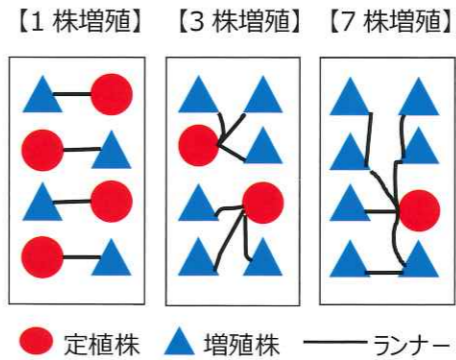


図1 定植・増殖方法

増殖が終了するまでの期間は、1株増殖区は1か月程度、3株増殖区は1か月半程度、7株増殖区は2か月以上でした。8月上旬に定植することによって、増殖なしの未分化定植区は、慣行の普通ポット育苗の分

植は、定植株と増殖株で開花のばらつきが小さく、慣行の花芽分化後定植とほぼ同時に開花しました。中旬定植と下旬定植もほぼ同時に開花し、定植株の開花は増殖株より早まりました。3株増殖でも定植時期が遅くなるほど生育の揃いが遅れ、定植時期が早いほど定植株、増殖株ともに開花日は早く、定植時期が遅いほど開花日も遅くなりました。収量に差はみられませんでした。

四 ランナー切り離しの有無

8月上旬に定植、3株増殖し、9月下旬にランナーを切り離した場合、定植株と増殖株の生育に差はみられず、切り離さない場合と比べても生育に差はみられませんでした。定植株の開花は切り離さない場合と比べ遅くなりましたが、増殖株の開花は変わらず、定植株と増殖株の開花のばらつきは小さくなりました。収量に差はみられませんでした。

五 炭疽病罹病株の定植

炭疽病菌接種株を定植し、ランナーを伸ばしたところ、先端部分が無症状であっても炭疽病に感染している事例がみられました。本ぽ増殖を実施する場合も、これまでと同様に健全な定植株の育成が重要です。

六 現地でのR3年産の様子

昨年度で本ぽ増殖に取り組み始めた6人の生産者に様子を伺いました。無遮光ではランナーが焼け、増殖に苦勞されたこと、定植前の除塩ができなかったことから原水のみ給液を10日間行い、その影響からか心止まり株が約2割発生したこと、増殖中のランナーの伸びが悪く、増殖終了が遅れたこと、などの事例がみられたことから、①栽培前に培地を除塩する、②早めに定植し早めに増殖を終了する、③花芽分化前に肥料を切らせすぎない、などの点に注意する必要があります。

七 おわりに

前述の6人の生産者は今年産でも継続して栽培されており、他にも取り組む方が増えていると聞いています。今後普及する見込みの高い技術であると思われるので、研究所においても栽培技術の確立に向け、現地と協力して引き続き研究を進めてまいります。

連絡先

磐田市富丘六七八ー一
静岡県農林技術研究所
野菜生産技術科
agriyasai@pref.shizuoka.lg.jp

の収量は、増殖株数の違いによらず増殖なしの未分化定植区と同程度であり、増殖株数の違いによる収量への影響はみられませんでした(図3)。また、増殖株数の違いによらず定植株の方が増殖株より株当たりの収量が多く、増殖なしの未分化定

植区や慣行の分化後定植区よりもやや多い傾向がみられました。

三 定植時期(増殖時期)

8月上旬定植、中旬定植、下旬定植と定植時期の違いが頂花房開花日等に及ぼす影響について検討しました。1株増殖では定植時期が遅くなるほど生育の揃いが遅れ、増殖株の開花が遅くなりました。8月上旬定